

「かぐや姫」に対する地の文の敬語表現

曾根誠一

「かぐや姫」に対する地の文の敬語表現

曾根 誠 一

はじめに

『竹取物語』の地の文において、尊敬語が使用されるのは、石作皇子を除く「色好み」四人の求婚者（皇子・右大臣・大納言・中納言）と帝であるが、かぐや姫については、山口仲美^[1]氏が「主要人物よりも低く扱われており、概して無敬語表現」（408頁）のだが、「四段（庫持皇子＝稿者注）以後には、九例ほどの敬語表現が散在している」と指摘されている。当該論文における氏の関心は、石作皇子と庫持皇子条間における断層について、表現の分析を通して、成立過程を解明する点にあり、かぐや姫の敬語表現に関する、具体的な分析や言及は、なされていない。

それに対して、井上親雄氏^[2]は、かぐや姫に対する地の文での尊敬語使用が、「人間の力の限界を超越した存在（神性を有するもの）」（46頁）であるためであり、その「神性を有す

ることが明白な箇所だけに敬語を用い」て、姫の「位格」を認定したことを示す機能を果たし」ている。それ故に、「それぞれの箇所では神性を有するという位格を認め」、「その位格に相当することばとして尊敬語を選んだ」（47頁）のであって、「かぐや姫自体に敬意を抱いているのではない」（46頁）と指摘されている。

また、地の文の敬語表現全般に互って論じた長沼英二氏^[3]は、「物語の進行に従って敬語の使用数と種類とが増加するのは、敬語の発達段階の反映」（319頁）のではなく、求婚者の「登場の順序に敬意表現が重くなる」のは、「主従関係」間の「場面が増加するほど、敬語の使用回数が増え」、「天皇をのみ敬意対象とする敬語動詞の存在が、物語後半の敬語の種類増加の原因」であると指摘されたのは、首肯できよう。

ただ、かぐや姫に対する地の文の敬語に、論点を絞り込ん

で論じている訳ではないため、網羅的な検討にはなっていないが、敬語使用は「必然」(314頁)であったという立場から、姫に対する敬語使用は、「主従関係の成立する関係では、上位者に対する敬意が重くなる」(第二則・細則口、320頁)場合と、「かぐや姫について、関係者との間に共感が成立する場合には、かぐや姫を敬意対象とする」(第三則)場合に分類することができる。そして、かぐや姫の求婚者に対する行為に謙讓語が使用されないという、第二則・細則イ「かぐや姫と求婚者との間には、上下関係が成立しない」と第三則との、二つの「特異な敬語使用規則は、かぐや姫の特異性(月世界の人)を表現するものではあるまいか」(327頁)とも述べておられる。

以下、井上・長沼両氏の指摘を再検証することになるのだが、かぐや姫に対する地の文の尊敬語使用について言及した、日本古典集成本(以下、集成本と略称)・新編日本古典文学全集本(以下、新編全集本と略称)・新日本古典文学大系本(以下、新大系本と略称)の、「かぐや姫の昇天」条での当該箇所、頭注や脚注を確認することを、論ずるための手懸かりとして、始めてみたい。

尚、稿者の調査では、尊敬語十二例(帝との手紙の遣り取

りの二例を含む)と、謙讓語五例が確認される。謙讓語は全て、帝に対する事例であり、身分的格差に基づく謙りであるので、尊敬語使用と関連する事例に限定して言及することとし、尊敬語の事例について、検討を加えることで、例外的な使用が生じた理由を考えてみたいと思う。

一

まず、かぐや姫に対して、地の文で尊敬語が使用される理由について、諸注釈書が指摘していることを確認するため、該当箇所の本文を引用してみたい。

①かぐや姫のみ御心にかかりて、ただ独り住みたまふ。よしなく御方々にも渡りたまはず。かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きてかよはさせたまふ。御返り、さすがに憎からず聞えか^はは^したま^ひて、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。

かやうにて、御心をたがひに慰めたまふほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろういでたるを見て、つねよりも、物思ひたるさまなり。在る人の「月の顔見るは、忌むこと」と制しけれども、ともすれば、人間にも、月を見ては、いみじく泣きたま

ふ。(新編全集本、63頁。二重傍線部は尊敬語、波線部は謙讓語で、以下同じ)

② 八月十五日ばかりの月にいでゐて、かぐや姫、いといたく泣きたまふ。人目も、今はつつみたまはず泣きたまふ。(65頁)

集成本は、①c「たまふ」に付注して、「このあたりから、地の文でも、かぐや姫に敬語が時々使われはじめる。変化の人としてよりも人間的側面から見られるようになってきた」との表れか(68頁頭注五)と指摘し、②d「たまふ」に付注して、「ただ泣くだけの無力なかぐや姫には超人性は感じられず、この上なく人間的である。ここの敬語も、そうした感じと、それへのいたわりの情の表現である(70頁頭注八)と指摘している。「解説」では、①c②def「たまふ」について、同趣旨の「いずれもかぐや姫の像が極めて人間化されている部分であって、そこには超人的な変化の人としての面影はない。この可憐な手弱女の姿に作者は無意識のうちに同化し、彼女を別次元の存在として考えなくなっていました(123頁)結果、姫の動作に尊敬語が使用されたと述べている。また、「不死の薬」を嘗め、帝に兵士派遣の礼状を認めて、手紙と「壺の薬」を「天人」を介して頭中将に渡し、昇天す

る条で、「かぐや姫に対して一再ならず敬語が用いられている(123頁)のは、「その使用法をみると、特に意図的とは思われない」。「本来ならば無敬語のはずなのが、何かに心を奪われてふと敬語を使ってしまったという趣が強い」と指摘している。すなわち、かぐや姫に対する地の文での尊敬語使用は、「無意識」の意図的ではない用法であると理解しているようである。

新編全集本は、②d「たまふ」に付注して、「このあたりから、かぐや姫の動作に敬語をつけるほうが一般的になってくる。天上の人であることがはっきりしてきたためであろう(64頁頭注二三)と指摘し、新大系本も、②dに付注して、「かぐや姫は今、地上の人間的な悲しみを深く感じている。敬語はその姫へのいとおしみによる(62頁脚注一〇)と指摘している。

①c②dfは、「泣きたまふ」と同一表現であり、cは、月の都に帰還する物語十年目の一月の時点での、かぐや姫の悲嘆を表現し、dfは、帰還する八月十五日直前の十三三日の時点での、cより一層深まった姫の悲嘆を表現している。悲嘆の原因を考えると、かぐや姫自ら、次のように語っている。

③ ささぎさまも申さむと思ひしかども、かならず心惑はしたまはむものぞと思ひて、今まで過ごしはべりつるなり。

……この月の十五日に、かの元の国より、迎へに人々まうで来むず。さらずまかりぬべければ、思し嘆かむが悲しきことを、この春より、思ひ嘆きはべるなり。(65頁)

④ ……日ごろも、いでゐて、今年ばかりの暇を申しつれど、さらにゆるされぬによりてなむ、かく思ひ嘆きはべる。

(70頁)

③では、かぐや姫が月の都へ帰還することを告白すること、翁夫婦が「心惑はしたまはむ」こと、「思し嘆かむ」ことを恐れてのことであつた、と語られている。すなわち、翁夫婦の惑乱と悲嘆に配慮する思い遣り、寄り添う思いが原因なのであり、かぐや姫が地上世界の人間として、最も尊い心を身に付け、人間的に完成していることが知られるのである。

④では、「今年ばかりの暇」(一年間の滞在延長¹⁾)を月の都の王に願ひ出たが、許可が得られず、予定通りに帰還せねばならないことが、原因として語られている。だが、この滞在延長も、翁夫婦の悲嘆を思い遣つてのことであり、その基底にある原因は、③と同一であるといえよう。

こうした背景を考える時、①c②d f「泣きたまふ」のか

ぐや姫が「泣く」行為は、翁夫婦の惑乱と悲嘆に配慮する姫の思い遣り、寄り添う思いに起因しているのであり(②e)「つみたまはず」も、姫の同じ心情に基づく行動と理解される、そうした姫に対して、尊敬語「たまふ」が使用されていると考えられるのであつて、井上氏の「月は畏れ慎しむべき対象」(60頁)であり、「それを見て異常な泣き方をする」と自体に畏怖を感じ、「人間の理解を超えた世界に属する者と認識したために「給ふ」を用いた」(61頁)という指摘や、長沼氏の侍女達に対して、「翁邸内において、かぐや姫は上位者」(226頁)であるために、尊敬語が使用されたという解釈には、従い難く思われる。

このように理解する時、かぐや姫に対する尊敬語使用は、意図的なものと考えるべきであり、新編全集本の「天上の人であることがはっきりしてきたため」ではなく、新大系本の「姫へのいとおしみ」というより、かぐや姫の相手に対する思い遣り、寄り添う思いという人間性に対する評価として、使用されているように思われるのである。

二

かぐや姫の思い遣り、寄り添う思いに対して、尊敬語が使

用される同様の事例を探すと、翁に対する次の叙述を指摘できよう。

⑤ 今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

とて、壺の薬そへて、頭中將呼び寄せて奉らす。

中將に、天人とりて伝ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣うち着せたてまつりつれば、翁を、「いとほし、かなし」と思しつることも失せぬ。この衣着つる人は、物思ひひなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して、のほりぬ。(75頁)

かぐや姫が、二千人の兵士派遣に感謝し、現在の心情を記す手紙と不死の薬を、「天人」を介して頭中將に渡し、帝に献上する動作に謙讓語「奉る」が使用されるのは、帝との身分差を考えれば、当然のことであるものの、ここに姫に対する尊敬語は、不使用である。地の文のかぐや姫の動作には、不使用が原則なのである。

そして、「天人」が頭中將に取り次ぐやいなや、別の天人が「天の羽衣」をかぐや姫に着せる動作に、謙讓語「たてまつる」が使用されているのは、月の都での姫の社会的地位の高さに起因するのであろう。かぐや姫が「天の羽衣」を身に

纏うことで、翁(嬬も包含されていよう)を気の毒で不憫に思う思い遣り、心を寄せる思いは、消え失せるのだが、姫のこうした思いに対して、尊敬語g「思し」は使用されているのであろう。

この尊敬語使用について、井上氏は、「天の羽衣着た結果」、「人間世界を超越した存在者になったことが明確に」(63頁)なったためであると指摘されるのだが、直後の「失せぬ」は、「失せたまひぬ」とならず、かぐや姫が「人間世界を超越した存在者」であることを表現する、飛ぶ車に「乗り」、「天人」を「具し」、月世界へ「のほり」という姫の動作に、尊敬語が不使用である理由は、説明されていない。更にいえば、帝自らの求婚断念を引き出す契機となった、「このかぐや姫、きと影になりぬ」(61頁)、「かぐや姫、元のかたちになりぬ」(62頁)という、姫の「神性」に関する叙述にも、尊敬語は使用されておらず、むしろ例外的に使用される個別の理由の解明こそが、求められていると思うのである。また、長沼氏は、「月の世界の人の立場」(326頁)に立った「かぐや姫は翁の上位に位置することになった」ため、翁との関係において、「かぐや姫に敬語が用いられるのは、この一事例のみである」という、異例の尊敬語使用が生じたと説明さ

れるのだが、翁を「いとほし、かなし」と思い遣る姫の思いに対して、g「思し」は使用されていると思うのである。

以上のように、g「思し」は、かぐや姫の翁に対する思い遣り、心を寄せる思いに対して使用されているのであり、姫に対する尊敬語使用の一類型が、再確認できるように思われる。

こうした事例は、石上麻呂足条の、次の叙述にも見出すことができ、これがこの類型の初例であろう。

⑥ これを、かぐや姫聞きて、とぶらひにやる歌、

年を経て浪立ちよらぬ住の江のまつかひなしと聞く
はまことか

とあるを、読みて聞かす。

いと弱き心に、頭もたげて、人に紙を持たせて、苦し
き心地に、からうじて書きたまふ。

かひはかくありけるものをわびはてて死ぬる命をす
くひやはせぬ

と書きはつる、絶え入りたまひぬ。

これを聞きて、かぐや姫、すこしあはれとおぼしけり。
それよりなむ、すこしうれしきことをば、「かひあり」

とはいひける。(55頁。傍線部は無敬語、以下同じ)

これは、石上麻呂足逝去の報に接したかぐや姫が、「すこしあはれ」という感情を抱いた動作に、尊敬語^h「おぼし」が使用された事例である。

⑥に至る展開を確認すると、麻呂足は、入手した「燕の子安貝」を、気絶状態から意識が戻った精神的混乱の最中、「人だに見れば、失せぬ」(50頁)という、従者の指摘を迂闊にも失念して、手を開いて見て喪失し、かぐや姫との結婚を果たせずに終わる。そうした「わらはげたるわざ」(55頁)を世間の人に知られ、嘲笑されることを気に病んで、「いと弱くなりたまひにけり」と衰弱してゆく。「これを、かぐや姫聞きて」とは、この噂を姫が聞き付け、見舞いの和歌「まつかひなしと聞くはまことか」を贈ることになったのである。このかぐや姫の動作「聞き」「やる」に、尊敬語は無敬語である。

こうしたかぐや姫の配慮に対して、麻呂足は、「かひはかくありける」と喜ぶ一方で、「死ぬる命をすくひやはせぬ」と、救命を訴える返歌を「書きたまふ」や否や、甲斐なく「絶え入りたまひぬ」ということになる。

かぐや姫の「これを聞きて」(尊敬語は無敬語である)とは、麻呂足の薨去という、不可逆的で衝撃的な事実主に依拠し

ながらも、麻呂足が命と引き換えに詠出した和歌も——その願望の実現は、不可能であったのだが——、かぐや姫にもたらされて、哀憐の情が湧き起こり、「すこしあはれ」と麻呂足を気の毒に思う、思い遣り寄り添う思いが語られる。その哀惜の情の表白に、尊敬語 h 「おほし」が付されていると考えるのだが、井上氏は、課題として「指定された物は、人間の力で入手することは不可能」（58頁）であり、「かぐや姫は、人間世界を超える者として認識された」ための尊敬語使用であると指摘される。また、長沼氏は、これを「燕の子安貝の獲得に失敗し絶命する」「まろたりの熱意に対するかぐや姫の共感」（326頁）の事例と解釈されるのだが、「共感」というより、思い遣り、心を寄せる思いの類型の事例だと思われるのである。

以上のように理解する時、地の文において、かぐや姫に尊敬語が使用される場合の一類型、思い遣り、心を寄せる思いの事例は、六例（① c ② d e f ⑤ g ⑥ h）確認できることになるのである。

そして、このことは、高田祐彦氏⁶が指摘される「かぐや姫の心を描くことがこの物語の軸となつて」（69頁）おり、「心の追求こそがこの物語本来の目的であつて」、「人間の心を描

「かぐや姫」に対する地の文の敬語表現

くという点で、『竹取物語』が初期物語の中で際立ってすぐれた達成を示して」（71頁）いて、以降の「作中人物のさまざまな心の関係が物語世界を展開させてゆくような物語の先駆をなしている」とする見解と、重なって来るのである。

三

次に、既に引用した①の前半で、帝と手紙の遣り取りをするかぐや姫に対して、尊敬語 a 「たまひ」 b 「たまふ」が使用されている事例について、検討してみたい。

帝は、竹取の翁と事前に詳細を詰めた上で、御狩の行幸の途次、翁邸を訪問してかぐや姫を笑見し、美麗な容貌を確認した上で、宮中に連れ帰ろうとするが、姫は「きと影」になつて、自らの非地上性を証明し、帝の求婚断念を引き出す。

かぐや姫に対する未練を断ち切れない帝は、「独り住み」をし、姫との手紙の遣り取りを通して満たされない思いを慰める。

こうした帝の思いと、かぐや姫の翁邸での「物憂い日々」の思いが、手紙の遣り取りを通して慰藉されたことについて、「御心をたがひに慰めたまふ」と叙述されるのだが、尊敬語 b 「たまふ」と接頭語「御」は、帝と姫の二人に対する敬意を表現していて、姫に限定された事例ではない。帝に対する

敬意表現に、和歌贈答の相手であるかぐや姫もまた、包含された結果としての事例であるため、検討の対象から除外することにする。

それに対して、「憎からず聞えかはしたまひて」は、帝との身分差に基づいて「聞えかはし」と、謙讓語を用いてかぐや姫を下げ、受け手である相手の帝を敬った上で、その動作をするかぐや姫に対して、a「たまひ」と尊敬語を使用する。

この直前には、「かぐや姫の御も」と「御返り」と、姫に関わる語に尊敬の接頭語が繰り返して使用されている（御狩の行幸時の贈答歌で、かぐや姫の返歌に「御返りごと」とあるのが、接頭語「御」の初出）。

帝の位置付けがかぐや姫に優越することは、謙讓語の使用によって明白なのだが、姫の地の文の動作に、尊敬語は不使用であるのが原則なのに、帝との手紙の遣り取りに関する叙述では、接頭語も含めると、三例の使用が確認される異例の頻出となっている。

こうした事態が生じた理由を考えると、かぐや姫は、帝の贈歌に対して、奥ゆかしい返歌をしたのであり、以降、四季折々の「木草」にこと寄せ、何気ない風情や趣を詠出する和歌が遣り取りされる展開には、帝を思い遣り、心を寄せる姫

の思いを読み取ることはできない。帝とかぐや姫が、「御心をたがひに慰めたまふ」こと、すなわち、二人が帝と異界の人という、それぞれの属性を超越して、日常生活次元での精神的交流を深めていた和歌贈答の世界では、対等の立場を確立していたからこそ、帝に準ずる位置付けとして、かぐや姫に対する尊敬語の異例な頻出も生じ得たのだと思われる。

このように理解する時、語り手は、こうした帝に準ずる位置付けという、相手との関連に依拠して、かぐや姫に対して尊敬語を使用したと考えられるのである。これは、かぐや姫と対象となる人物との関連に依拠して尊敬語を使用する、第二の類型に分類することができるように思われる。

これと同様の事例は、庫持皇子条に、次のように叙述されている。

- ⑦ かねて、事みな仰せたりければ、その時、一の宝なりける鍛冶工匠六人を召しとりて、たはやすく人寄り来まじき家を作りて、竈を三重にしこめて、工匠らを入れたまひつつ、皇子も同じ所に籠りたまひて、領らせたまひたるかぎり十六所をかみに、蔵をあげて、玉の枝を作りたまふ。

かぐや姫のたまふやうに違はず作りいでつ。いと

しこくたばかりて、難波にみそかに持ていでぬ。(28頁)

この前半の段落の主体は、庫持皇子であり、その地の文の動作に、「家を作りて」「三重にしこめて」の二箇所を除いて、尊敬語が使用されている。⁽⁸⁾ 尊敬語は、「仰せ」「召し」「入れたまひ」「籠りたまひ」「領らせたまひ」「作りたまふ」と、庫持皇子が主体的に関わっている動作に、使用されているのに対して、「作り」「しこめ」は、技術的な専門性を必須とする動作であり、皇子の高貴な属性にそぐわず、主体的に関わる事柄ではないために、無敬語となつたのであろう。

後半の段落の贗物作製の動作「作りいで」の主体は、「鍛冶工匠」であり、当然無敬語である。難波の港に「持ていで」も、無敬語であるから、主体は「鍛冶工匠」であると思われるが、「いとかしこくたばか」るのは、「心たばかりある人」庫持皇子の属性と重なる。皇子の指示に従つての、緻密な計画に基づく「鍛冶工匠」の行動であり、人目を引かぬよう、庫持皇子とは別行動での難波移動なので、無敬語なのであろう。庫持皇子の依頼で「蓬萊の玉の枝」を作製した時、「鍛冶工匠」は、それが、かぐや姫から結婚の条件として提示された難題であつた事情を、承知していなかつたようである。

⑧文に申しけるやう、「皇子の君、千日、いやしき工匠らと、

「かぐや姫」に対する地の文の敬語表現

もろともに、同じ所に隠れあたまひて、かしこき玉の枝作らせたまひて、官も賜はむと仰せたまひき。これをこのごろ案ずるに、御使とおはしますべきかぐや姫の要じたまふべきなりけり、とうけたまはりて。この宮より賜はらむ」と申して、「賜はるべきなり」といふを……。(34頁)

これは、「鍛冶工匠」六人が連れ立って、翁邸を訪れ、「蓬萊の玉の枝」作製の「禄」を、かぐや姫に要求する事情を記した書状の文面である。

「玉の枝」完成の暁には、官職就任も取りはからうとの約束で、「千日」(正確には九百余日) 尽力して作製した。この作製事情を、最近になって改めて考えて見ると、かぐや姫の所望によることであつたと初めて気付いた(助動詞「けり」というのである)。

「このごろ」とは、贗物の「玉の枝」を難波の港に運び出した後、庫持皇子が奈良の都の自邸に連絡を取り、留守邸の従者に出迎えを指示する時点で、既に「鍛冶工匠」の役割は終了しており、不要となつた彼等は、目立たぬように帰京したのであろう。三年に互る「蓬萊の玉の枝」作製の「禄」は、庫持皇子の帰京後、速やかに支払われるものとの期待に反し

て、皇子は自邸に立ち寄らず、翁邸のかぐや姫のもとに直行したのである。

「玉の枝」を入れた長櫃に覆いを掛け、都を目指す庫持皇子一行の様子は、「優曇華の花持ちて上りたまへり」(29頁)と、世間の噂になり、かぐや姫は、「この皇子に負けぬべし」と、塞ぎ込むことになるのだが、「鍛冶工匠」は、「玉の枝」と噂との乖離を、奇異に感じたことであろう。そして、三年前に、庫持皇子の従者が「かぐや姫の家には、「玉の枝取りになむまかる」(27頁)と報告し、難波からの出港時、大勢の従者が見送った事実を知ること初めて、「玉の枝」は、姫の所望した品物であることと、皇子が翁邸に直行したことが、一連のものとして理解できたのであろう。

こうした事情を踏まえた上で、かぐや姫に対する尊敬語⑦「i「のたまふ」が、使用された理由を考えると、「鍛冶工匠」は、生駒山中で贖物を作製する時点では、姫との結婚の条件を充足するための依頼品とは知らず、庫持皇子の依頼に際して対応しているに過ぎない。語り手の「かぐや姫ののたまふやう」は、「鍛冶工匠」の認識に依拠した表現のではなく、物語展開の全体を統轄する、全知的視点に立つ語り手の認識に依拠した叙述なのである。

「鍛冶工匠」に伝達された「蓬萊の玉の枝」の形状は、物語展開としては、庫持皇子の発言として機能しているのだが、実態は、かぐや姫の発言に基づいていることを再確認する叙述となっている。

そして、かぐや姫が「御使」(召人)の立場に過ぎないとはいえ、庫持皇子の求婚相手であること。「内匠寮」に勤務する「一の宝なりける鍛冶工匠六人」(28頁)は、無位の長上工と思われ、社会制度的には、竹取に過ぎない翁とその養女であるかぐや姫より、上位に位置付けられると思われるのに、訴状を記す⑧の文面の前後の地の文には、謙讓語「申す」が使用され、更に、文面中に翁邸を「この宮」と表現していることから、富豪の長者となって豪族化し、上流貴族と同等の生活を手した翁の実勢を、無位の職員より上位のものとして、語り手(作者も包含される)は位置付け、認識していた。これらのことが勘案されて、かぐや姫に尊敬語「iのたまふ」が使用されたのであろう。^⑨

以上のように、かぐや姫に尊敬語を使用する類型の第二として、比較の対象となる人物との対比を通して、使用されたり、相手の社会的地位に準ずる扱いを受けて、使用される場合があることを確認しておきたい。

四

かぐや姫に対する尊敬語使用の残る三例について、検討してみたい。

まず、第二の類型に分類される使用例⑦i「のたまふ」が確認された庫持皇子条で、「鍛冶工匠六人」が、三年間に互る「蓬莱の玉の枝」作製の労苦に対する対価としての「禄」を、かぐや姫に請求する書状を提出して、贖物であることが証明され、姫が庫持皇子との結婚を辛うじて回避し得た後の、次の叙述の事例から検討してみたい。

⑨ かの愁訴せし工匠をば、かぐや姫呼びすゑて、「嬉しき人どもなり」といひて、禄いと多く取らせたまふ。工匠らいみじくよろこびて、「思ひつるやうにもあるかな」といひて、帰る。(36頁)

かぐや姫は、「鍛冶工匠」による「禄」請求の直訴によって、庫持皇子との結婚を回避し得たことに対する、深い感謝の思いから、「いと多く」の「禄」を付与する、その動作に尊敬語j「たまふ」が使用されている。

かぐや姫の動作に、尊敬語が使用された理由を考えると、井上氏は、「皇子が力尽きた後の勝利者の振舞いである」(57頁)ためと指摘され、長沼氏は、⑦iの場合と同様に、「鍛

冶工匠」とかぐや姫との「社会的身分」差に基づいた尊敬語使用と考えておられる(325頁)のだが、⑦の場合には、庫持皇子の求婚相手という前提が存したのに対して、⑨では既に、それが喪失されていること。⑦は、物語展開全体を統轄する、全知的視点に立つ語り手による総括的叙述であるのに対して、⑨は、かぐや姫の「鍛冶工匠」に対する具体的な行為の叙述であり、差異が存することを勘案すると、同一の事例として処理することは、如何であろうか。

「鍛冶工匠」の直訴によって初めて、かぐや姫は、庫持皇子との結婚を回避し得たのであり、それに対する深い感謝の念が、主因たることは勿論のだが、姫も贖物と判別できなかった「蓬莱の玉の枝」の出来映えを踏まえて、「千日」に互る作製の労苦に思いを馳せ、「鍛冶工匠」に寄り添う思い遣りの情が、この裏面に存することも相俟って、「禄いと多く」が付与されたのであろう。こうしたかぐや姫の配慮に対して、尊敬語が使用されたのではなからうか。

すなわち、j「たまふ」は、かぐや姫の相手を思い遣り、心を寄せる思いに対して、尊敬語を使用する第一の類型に分類できると思うのである。

残る二例は、昇天の段の事例であり、先ず、月へ帰還する

直前の「不死の薬」に関する、次の叙述を検討してみたい。

- ⑩ 天人の中に、持たせたる箱あり。天の羽衣入れり。またあるは、不死の薬入れり。一人の天人いふ、「壺なる御薬たてまつれ。穢き所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ」とて、持て寄りたれば、いささかなめたまひて、すこし、形見とて、脱ぎ置く衣に包まむとすれば、在る天人包ませず。御衣をとりいでて着せむとす。

その時に、かぐや姫、「しばし待て」といふ。「衣着せつる人は、心異になるなりといふ。物一言いひ置くべきことありけり」といひて、文書く。天人、「遅し」と、心もとながりたまふ。(74頁)

かぐや姫の動作に対する尊敬語k「たまひ」は、「一人の天人」が、姫に対して不死の薬を「たてまつれ」、穢土としての人間世界の物を「きこしめし」と、敬意の重い尊敬語を使用して語りかけたことに対する、対応としての行動に使用されている。

「不死の薬」を嘗めて、体内時間が月の都のそれへと転換することは、月への帰還準備の一であり、地上世界の埒外の存在となることであるから、新編全集本が指摘する「天上の

人」性の表現という解釈も、一見可能であるように思われる。井上氏は、「不死の薬をなめることは、神性を有するものでなければ出来ない」(63頁)ためであると指摘されるのだが、ここはむしろ、「壺なる御薬」を「いささか」嘗めることで、残る「御薬」の「すこし」を翁夫婦に「形見」として遣し、帰還後の健勝を保証しようとするかぐや姫の思い遣り、心を寄せる思いに基づく行動に対する尊敬語使用と、読み取るべきではなからうか。

このように理解する時、k「たまひ」も、かぐや姫の相手 を思い遣り、心を寄せる思いに対して、尊敬語を使用する類型に分類できると思うのである。

かぐや姫に対する尊敬語使用の最後の事例は、姫が月の都へ帰還する直前の場面で、帝に手紙を書き残す、次の叙述に見られる。

- ⑪ かぐや姫、「物知らぬこと、なのたまひそ」とて、いみじく静かに、朝廷に御文奉りたまふ。あわてぬさまなり。

かくあまたの人を賜ひて、とどめさせたまへど、許さぬ迎へまうで来て、取り率てまかりぬれば、口惜しく悲しきこと。宮仕へ仕うまつらざるぬるも、かくわ

づらはしき身にてはべれば。心得ず思しめされつらめども。心強くうけたまはらずなりにしこと、なめげなるものに思しめしとどめられぬるなむ、心にとまりはべりぬる。

とて、

今はとて天の羽衣着るをりぞ君をあはれと思ひいでける

とて、壺の葉そへて、頭中将呼び寄せて奉らす。(74頁)

ここでも、①の場合と同様に、かぐや姫が帝に書き残す手紙には、「御文」と尊敬の接頭語が付され、姫が帝に差し上げる動作には、謙譲語「奉る」が使用されて、帝との身分差が明確に位置付けられた後、姫に対して尊敬語「たまふ」が使用されている。

地の文では、不使用が原則のかぐや姫に対して、何故に尊敬語が使用されたのか、その理由を考えると、井上氏は、「かぐや姫も、帝と同等に神性を有することが改めて認識され」(63頁) ためである、と指摘されるのだが、帝に対する「御文」の内容が問題となろう。

かぐや姫を翁邸に留めるべく、二千人の兵士を派遣してくれた帝の配慮に対して、感謝の意を表しつつ、不本意ながら

「かぐや姫」に対する地の文の敬語表現

も、月の都に帰還せざるを得ない無念さを記した上で、帝の求婚を拒否せざるを得なかつた事情と、自身の真情を吐露することは、帝を思い遣り、心を寄せることと、実質的に等価の行為であると評することができよう。

このように考える時、尊敬語「たまふ」が使用された理由は、かぐや姫の相手を思い遣り、心を寄せる思いに対して、尊敬語を使用する類型に分類できると思うのである。

尚、蛇足ながら、⑩の破線部「たまふ」は、「あわてぬさま」で、帝に書き残す手紙を認めるかぐや姫を、「遅し」と「心もとなが」る「天人」の動作に付されている。迎えに到来した月の都の人に対して、地の文での尊敬語は、不使用であり、唯一の例外を如何に理解したらよいかを考えると、集成本は、「天人には敬語が用いられないのが、この物語の例である。あるいは、伝写上の誤りか」(80頁頭注一一)とし、新大系本は、「敬語を用いたのは「王とおほしき人」だからか」(73頁脚注二八)と付注する。

飛ぶ車に乗る別格の「王とおほしき人」を、「天人」という一般的な呼称で叙述するのは、不自然であり、新大系本の付注には従いがたく思われる。「遅し」と苛立ち、心穏やかならぬ「天人」に対する尊敬語使用は、⑩の直後に連続する

⑪で、かぐや姫が「いみじく静かに、朝廷に御文奉りたまふ」と叙述されていることを考えると、相手を思い遣り、心を寄せる思いを抱く姫に対する使用のそれとは、対極に位置する事例であるといえよう。

「天人」に対して、唯一の尊敬語が使用された理由は、集成本の「伝写上の誤りか」という指摘が穏当な判断であろうが、敢えて臆断を述べれば、「天人」とかぐや姫との対比を通して、姫の思い遣り、心を寄せる思いという、地上世界の人間の優越性を際立たせるための、意図的使用の可能性も考えられると思うのだが、如何であろうか。

五

以上の論述をまとめると、次のようになろう。

地の文において、かぐや姫の動作に尊敬語が例外的に使用されるのは、①bの事例を除外すると、次の二通りに分類できよう。

I 類型 「かぐや姫が相手を思い遣り、心を寄せる思いを抱いた場合」

9 例 ①c、②def、⑤g、⑥h、⑨j、⑩k、

⑪l

II 類型 「比較の対象となる相手との関係性で使用される場合」

2 例 ①a、⑦i

右の分類で明らかのように、II 類型の「比較の対象となる相手との関係性で使用される場合」は、①aの帝に準ずる処遇を受ける場合と、⑦iの語り手が全知的視点に立つて総括的に叙述する、「蓬萊の玉の枝」の形状に関する場合だけであり、尊敬語使用の81・8%は、I 類型の「かぐや姫が相手を思い遣り、心を寄せる思いを抱いた場合」であって、かぐや姫の「人間性」発露の場面や叙述に限定して、例外的・意図的に使用されているのだと考えるのである。

註

(1) 山口仲美氏「竹取物語の文体と成立過程」(『平安文学の文体の研究』明治書院 昭和五九年二月)、初出は昭和五四年。

(2) 井上親雄氏「竹取物語の敬語——かぐや姫の神性との関係」(井上親雄・山内洋一郎両氏編『古代語の構造と展開』和泉書院 一九九二年六月)。本稿中の井上氏の論文引用は、全て当該論文による。

(3) 長沼英二氏「竹取物語の地の表現の敬語」(『研究講座 竹取物語の視界』新典社 平成一〇年五月)。本稿中の長沼氏の論文引用は、全て当該論文による。

(4) 賀茂季鷹書人『竹取物語』慶長古活字本(現在、京都市歴史資料館に寄託)には、「春の比より天にある父母へ、今一年は此世界にをらんことの暇を申つれども、ゆるしなきといふ也」(45丁裏9、文化十一年秋、墨筆で行間に書き入れ。読点は稿者)とある。

尚、季鷹旧蔵本は、古活字十行甲本ではあるものの、11丁表8「可不」(二格、季鷹本)―加字」(二格、甲本)、28丁表10「太登止楚云」(全て全格)―「多止波以比」(全格、二格)、46丁裏9「奈利」(全格)―那利」(二格)の三箇所が相違しており、異版八種と知られる。

また、季鷹は十行甲本の文字を塗抹して、仮名遣いや字母、踊り字を書き改める事例が散見される(188箇所)だけでなく、意改する箇所も若干ながら見られる(13箇所)ことを付記しておく。

(5) 「かぐや姫は罪をつくりたまへりければ」に付注して、集成本は、「かぐや姫は、この天人の王(王とおぼし

き人) 〓稿者注)も敬語を用いるような月世界でも最高の身分の存在だったのである」(78頁頭注三)と指摘し、新編全集本は、「天人の王が、かぐや姫に敬語を用いているのに注意。姫は月世界の尊い人だったのである」(72頁頭注二)と指摘し、新大系本は、「王が敬語を使うほど、かぐや姫は月の都では高貴な身分である」(70頁脚注八)と指摘する。

かぐや姫が「百人ばかり天人具して」帰還する時、「飛ぶ車」に同乗する「王とおぼしき人」とは、「思しき」という曖昧で客観性を欠く表現を考えると、月の都の「王」の代理としての勅使なのではあるまいか。それ故に、かぐや姫に対して敬語を用いて呼びかけるのであり、姫は王女(内親王)のように思われる。

(6) 高田祐彦氏「『竹取物語』の心とことば」(『平安文学史論考』武蔵野書院 二〇〇九年一二月)

(7) 長沼氏は、かぐや姫が「和歌の贈答を反復するのは、天皇との間においてのみ」(326頁)であることに、「天皇との共感」を読み取り、姫が「求婚者と同じ心情を共有したときに、かぐや姫を求婚者と同じ階級に所属させる」(327頁)と指摘されるが、「聞えかはしたまひ

て」と、謙讓語を用いて帝との関わりを規定している以上、「同じ階級」ではなく、準ずる位置と考えるべきであろう。

- (8) ⑦「領らせたまひたるかぎり十六所をかみに、蔵をあげて」は、本文難解箇所である。保立道久氏「『竹取物語』と神道」(『国文学解釈と鑑賞』平成二三年八月号)は、本文を校訂せずに、「知らせ給ひたる限り十六社そ拜みに、竈突くどをあけて」と理解し、知る限りの神社十六社の神を拜むために、煙出しの穴から煙をあげて、の意と解釈される(126頁)。いずれにせよ、「あけて」に尊敬語は不使用のだが、直後の「作りたまふ」には、使用されている。文章の途中で「箇所欠落する事例は、散見されるので、同様の事例と考えて、検討の対象には含めないことにする。

- (9) ⑦の尊敬語「のたまふ」について、井上氏は、「人間の世界では入手できないもの」(57頁)である課題を「課したかぐや姫は、人間の力を超えた世界に立っている」と、「認定した時」に、尊敬語が使用されると指摘され、長沼氏は、「皇子の求婚対象となっている」(325頁)こども含めて、「鍛冶匠らと比較して、かぐや

姫は社会的身分における上位者」であるためと指摘される。私見は、長沼氏の理解と重なるが、この尊敬語使用は、全知的視点に立つ語り手の立場からの、総括的叙述であって、姫の具体的な行動を記す叙述ではないことを確認しておく。

(そね・せいいち／本学日本文学科特任教授)